親密圏と公共圏をつなぐサブシステンスの再構築に関する研究

Reconstruction of Subsistence, Linking the Intimate Sphere with the Public Sphere

増田 和也（京都大学東南アジア研究所 特任研究員）

【メンバー】

田崎　郁子（アジア・アフリカ地域研究研究科 博士後期課程 / 日本学術振興会特別研究員）

大石　和男（京都大学大学院農学研究科 助教）

【ねらいと目的】

今日の農山村では、グローバリゼーションの拡大により、地域社会の生活の基盤であったサブシステンスをとりまく環境は大きく変容している。ここでのサブシステンスとは、たんなる生業ではなく、自律的な生業と生活をめぐって必要となる物質的・社会的基盤の構築とその保持に向けた活動を意味する。本ユニットでは、昨年度の研究によりサブシステンスをめぐる今日的な状況を分析する上で以下の 3 つの視点を抽出し、本年度もこれに依拠しながら研究を継続する。

1) 従来のサブシステンスは地域内（＝親密圏）での営みであったが、近年ではローカルレベルを超えて社会全般（＝公共圏）をも活動対象にせざるをえない状況が生じている。大石は日本の農山村の女性による取り組みを対象に、エンパワーメントから社会運動への変遷のなかで、公共圏を基盤とした協働へと向かう動きを分析する。

2) その逆の構図として、権力側が公共圏の観点からサブシステンスを推進・利用している場合がある。田崎はタイにおける「足るを知る経済」言説や生業と民族の表象に着目し、その中での住民の商品作物生産への関わりを分析する。

3) 地域社会がサブシステンスを選択するという行為自体にも、その前提条件として自己決定権の保持が必要となる。増田はインドネシアにおける強制移住経験者の生活の立て直しに向けた取り組みを取り上げ、両者の関係性について考察する。

以上の個別研究を総合的に検討し、親密な人間関係に基づいたサブシステンスが公共圏とのつながりのなかで賛同者や正統性を獲得しながら維持・ 再構築が試みられている動きを浮き彫りにする。

【活動の記録】

現地調査（調査期間、調査者、調査地、調査目的）

1．2009 年 7 月 1 日～2010 年 3 月 21 日、田崎郁子、タイ国チェンマイ県サモン郡ボケウ行政区メーヤングハー村、同県メーチェム郡、同県ムアン郡ルワム・ミット村、チェンマイ大学、タイ国におけるカレンの社会変容（特に民族の表象と生業実践における換金作物栽培の影響）に関するフィールド調査

２．2009 年 12 月 18 日～2010 年 1 月 1 日、増田和也、インドネシア共和国ジャカルタ市内、インドネシアの森林制度および開発史に関する資料文献収集

３．2010 年 1 月 23 日～25 日、大石和男、福井県坂井市三国町、農村女性のサブシステンス活動に関する実態調査と資料収集

読書会

2009 年 7 月 21 日、11 月 12 日（参加者：大石和男、増田和也）

【成果の概要】

上記の計画のとおり、今日の農山村においてサブシステンスをめぐる変容について、グローバリゼーションや市場経済の拡大と関連づけながら、日本・タイ・インドネシアにおける農村を対象に現地調査を実施した。

1) 大石は、先進国におけるサブシステンス思想・運動の史的展開に関する研究として日本における戦前期農本思想とアメリカにおけるアグラリアニズム(agrarianism)を取り上げ、両者の比較検討を行った。その結果、これまで関連性が指摘されながらもその詳細についてはあまり明らかにされていなかった両者の異同について解明できたと同時に、両者の共通部分がいわゆるサブシステンスにまつわる思想であることも明らかとなった。

2) 田崎は、フィールド調査により、権力側の語る「足るを知る経済：セタキット・ポー・ピアング」言説や NGO や研究者、一部の指導層を中心として流布してきた「自給的生業を営み森と共生するカレン像」が、商品作物を生産するカレンの地域社会の中では、自給生産対商品生産という先行研究が前提としてきた二項対立を曖昧にするように用いられていること、を明らかにした。また、このような生業と民族の表象をとりまく言説が、実生活の中でどのように作用しているのか、差異化と同化に着目しながら考察した。

3) 増田は、インドネシアにおける国内移住・村落行政について文献資料を収集するとともに、スラウェシ中部森林域の村落を対象に調査をおこなった。調査地周辺では県分割がおこなわれ、新県政府は地域独自性の根拠として調査地社会に伝統文化の正統性を求めようとしている。移住元に帰還した人々にとって村落自律のために行政支援は不可欠であるが、文化伝統が誤用されることを警戒している。また、移住元と移住先との間で新しい関係が生み出されつつあることが明らかとなった。